「英語・ICT・探究」を強化し、20年後の世界に羽ばたく子どもを育成

成蹊小学校

東京帝国大学在学中から人材育成の重要性に目覚め、盟友・今村繁三と岩崎小弥太の支援のもと立ち上がった大正自由教育の旗手、中村春二により1915年に開設された成蹊小学校。創立110年を迎え、「桃李不言下自成蹊」（桃李ものいはざれども、下おのづから蹊（こみち）を成す」という『史記』の有名な一節から採られた校名に卓越した教育理念が刻み込まれている同校の魅力について、荻野雅校長に語ってもらいました。

荻野 雅校長

――社会の高度化・複雑化に伴い、私立小学校に求められる期待が高まっています。貴校の特徴についてお教えください。

私立小学校の果たす役割や使命には、大きく分けて３つあると考えます。

その１つは「**多様な教育の提供**」です。公立小学校と異なり、私立小学校では独自のカリキュラムや教育方針に基づき教育活動を行っているので、各家庭の価値観に沿って学校を選ぶことができます。本校の場合は、行事を通した個と集団の関係構築ですとか、日記を通した子どもの気持ちに寄り添った教育、凝念や心力歌を通した心の教育、低学年からの専科制や高学年の完全教科担任制によるレベルの高い教育、１年生からのネイティブによる英語学習やオーストラリア体験学習などの国際理解教育などにより、独自の教育を展開しています。

２つ目が「**リソースを活かした高い教育水準**」です。私立では多くの学校で新しい教材や教具、最新のテクノロジーを活用した教育や専門的な講師による授業が行われています。本校は小・中・高等学校から大学・大学院までがワンキャンパスにあるという環境を生かし、大学生がティーチング・アシスタントとして英語の授業の指導補助を行ったり、クラブ学習のサポートを行うなどの一貫連携を行っています。また、中高大の施設が使えるという充実した環境、高学年で実施している大学教員による体験学習などをリソースとして持っており、それを最大限に活かす形で高い教育水準を保てていると考えています。

３つ目が「**社会的なネットワークと価値観の形成**」です。同じ教育理念に共鳴したご家庭が集う私立小学校では、価値観や文化的な背景が共通していることが多いため、学校内でも社会的ネットワークが築かれやすく、同窓の絆や誇りが強いことも大きな特徴です。このように、私立小学校は単に知識を教えるだけではなく、子どもたちの人格や社会性を育み、個々の可能性を引き出す場としても重要な役割を担っていると考えています。

凝念（ぎょうねん）の様子

「心の共鳴」を重視し、「自奮自発の精神」を涵養

――貴校は今年、創立110周年を迎えました。貴校が目指されている教育像とはどのようなものでしょうか。

本校の教育の理念は、成蹊学園の建学の精神である「個性の尊重」「品性の陶冶」「勤労の実践」に、創立者・中村春二の教育観「師弟の心の共鳴」「自奮自発の精神の涵養」を加えた５つが柱となっており、小学校では特に後者の２つを重視しています。

このうち、「**師弟の心の共鳴**」については、中村春二が残した言葉、「教室にあっても、運動場にあっても、遠足の途上にあっても近く相接し、親しく相語りて其の長所と短所とを明らかにし、長所は益々之を発達せしめんことを図り、短所は力めて之を輔導先ことを祈らねばならぬ」に由来します。現代的に言い換えると「できるだけ子どものそばにいて、よいところはたくさん褒めましょう。よくないところがあったら、そこはしっかりと指導しなさい」ということです。

今日はICT全盛の時代ですから、アプリケーションを使えば子どもに考えを入力させてまとめるのは簡単ですし、子どもがいつ、どこにいたかということもデータで調べることは可能です。しかし、それが子ども理解につながるかといえば疑問です。子どもがその考えに至った背景や、周りの子どもたちとの関係性、そして何よりも子どもの感情の表れである表情を総合的に判断するのが本来の「子ども理解」です。創立者の考えと同様、可能な限り子どものそばにいて、子どもの様子を見ながら接していくことが今日でも重要だと考えています。

もう一つの「**自奮自発の精神の涵養**」は、本校創立当初の保護者会で配布された「成蹊小学校設立趣旨」にある言葉によるものです。そこには「何事にも自奮自励の精神をもって当たらしめ、自分のための教育だということを、小さいときからしっかり会得させたい」と述べられています。学習とは「自分のための学び」であり、子ども自身がやる気さえ起こせば、それを後押ししてあげるだけで、子どもたちも苦しむことなく学びに臨むことができるのです。

スタートは簡単なところから始まります。１年次に「自分が好きなことをもう少し調べてごらん」というところから始め、次第に自分が苦手なものに進んだり、友達のよいところを学んだりする。このように、６年間かけてじっくりと自学自修の習慣をつけることに取り組んでいます。

こみち科での栽培の授業

夏の学校での遠泳（６年生）

グローバル、ICTなど次代に活きる教育を展開

――貴校の教育の特徴についてお教えください。

本校の一番の特徴は「**心の教育**」です。１つは、創立者が「岡田式座禅法」という座禅の取り組みにヒントを得て開発した「凝念」という精神集中法です。目を閉じて背筋を伸ばし、ゆっくり呼吸をしながら集中力を高めていきます。そしてもう１つが「心力歌」です。漢文調の歌詞で書かれていますが、宗教的な意味はありません。自然の偉大さを伝えながら、人間の精神的な強さや人間としての成長を促すメッセージが込められています。

二番目の特徴が「**常に先を考えた教育を実施する**」というものです。創立者の中村春二自身、新しいものを取り入れることに意欲的な人でありました。創立２年目の1916年には、コンクリート製で長さ20mほどのプールを作りましたが、これは当時の日本の小学校で唯一のプールだったと聞いています。他にも、当時はなかなか手に入らなかった顕微鏡を整備するなど、新しいものや優れたものをどんどん取り入れるという考えが今日でも活きています。

――貴校独自の「こみち科」も先導的な取り組みの一つですね。

この教科は、創立当初から行われてきた「園芸」を元に、1950年実施の「生活学習」を発展・継承したものですが、この生活学習は1992年度から導入された「生活科」の原点だともいわれています。子どもたちが五感を使って直接的な体験をしながら学ぶことを目的とした教科で、抽象的な知識が具体的なものとして身体に染み込むため、記憶に残りやすくなりますし、子どもたちの感受性や観察力が養われ、より豊かな人間性が育まれると考えています。

――全国の小学校で行われている「探究学習」も、いち早く取り組まれました。

本校では、５・６年生がこみち科の中で行っている「卒業研究」が探究学習に当たります。基礎研究からスタートし、実験や観察を経て、最終的にはプレゼンテーションの形で発表するというもので、18年ほど前から取り組んでいます。この卒業研究を通じて、問題を発見する視点や問題解決能力、研究スキルなどを養い、自己表現力を高めています。

テーマによっては、成蹊大学の教授と連絡を取ってアドバイスをいただいたり、博物館の学芸員の方に会って、お話を伺ったりする児童もいます。ある児童は、民放で活躍中の男性アナウンサーの人気の秘密を調べるため、ラジオ番組に投稿したところ、本人から直筆の手紙をいただき、その後も朝のニュース番組で本校の体操シーンのビデオを取り上げていただいたりと、思わぬ形で繋がりができたことがあります。

ほかにも、ラーメンが好きな女子児童が研究のためお店の人に直談判をして、厨房に立たせてもらったり、父親とペットロケットの研究に熱心に取り組んでいた児童が、大学ではロケット工学の分野に進んだということもありました。卒業研究は本校での学びの集大成として、子どもたちが一人ひとりの興味関心を深め、思考力や表現力を高める重要な契機となっています。

――グローバルな国際理解教育や理数教育、SDGs達成に向けたESD教育などにも注力されています。

本校は創立当初から教科担任制を採り入れ、2000年からは完全教科担任制を実施しています。国際理解教育に関しては、１年生からネイティブスピーカーの教員による国際理解教育を行っているほか、国際交流プログラムとして、希望者を対象に５年生の３月と６年生の８月に「オーストラリア体験学習」も実施し、現地での生きた英語の学習を進めています。創立以来の「本物に触れる」教育は今日まで息づき、2019年には本学園がESDの推進拠点であるユネスコスクールにも認定されました。

――子どもたちの成長の支援として、宿泊行事も盛んです。

夏の学校として、１年生から３年生までは芦ノ湖畔にある箱根寮で楽しい充実した時間を過ごし、４年生は南房総白浜、５年生は志賀高原で自然を教材にした体験学習なども行います。そして、６年生になると南房総岩井で2kmの遠泳に挑みます。水泳師範団という、本学園のOB・OGによる全面的なサポートにより、世代を超えた一大交流行事となっています。

――貴校を目指すご家庭に向けてメッセージをお願いします。

現在、私は「20年先の未来で輝くこども」を考えた教育に取り組んでいます。具体的には、これまで述べてきた英語とICTと探究学習の強化です。国レベルでの調査、研究でも明らかなように、これらは20年先の世界で必要とされる資質であり、常に最先端の教育に対応できるよう、教員の研究の機会もしっかりと確保しています。

こうした本校の取り組みが、実際の学校生活の中でどのように展開されているのかをご覧いただくためにも、ぜひオープンスクールなどの機会に足を運んでいただけたらと思います。

――本日はありがとうございました。